

真宗におけるビハーラの可能性(二)

塚 田 博 教

はじめに

これまで、拙論において、今日におけるビハーラ活動の背景と概要、そしてその実践技術について論究してきたが、今一度、原点確認の為、浄土真宗の開祖である親鸞より死生観、ビハーラの原意を探り、現代のビハーラ活動者、及び活動の啓発について言及する。

1 親鸞におけるビハーラの源流

具体的に親鸞における死生観を窺わんとする時、その生涯のターニング・ポイントに焦点を合わせて鑑みる事が最良の手段である。

これは、九歳の得度出家時(養和元年、一一八一年)。十九歳(建久二年、一一九一年)の時に受けたという夢告。法然の元に赴く、二十九歳の時(建仁元年、一二〇一年)。そして、三十五歳の時(承元元年、一二〇七年)の念仏弾圧による越後への流

罪。四十二歳の時(建保二年、一二二四年)の、上野国佐貫における衆生利益の為の三部経の千部読誦の中断、及び、五十九歳の時(寛喜三年、一二三〇年)の、回顧内省である。

親鸞の帰洛後、その弟子達の死の看取りにおいても親鸞の死生観が露現するのである。特に、覚信房と明法房の死の看取りに関する記述により、浄土真宗における理想的な看取りの状況が一つ明らかとなる。念仏を通して、看取る側と看取られる側の間に深い信頼関係、安らぎというものが成立しているのである。しかしながら、臨終は必ずしも理想的なものばかりではない。『末燈鈔』の第六通に記述される飢饉や疫病による門弟達の凄まじい死様の中において、決して忘却してはならぬ親鸞の死生観が存在する。また、死の瞬間において習俗に執着する衆生の姿に対しても、親鸞の真摯な態度を汲み取る事ができるのである。その後、息子の善鸞の義絶を経て、親鸞自身の死に臨む訳である。

その時、娘の覚信尼が親鸞聖人の臨終に奇瑞がない事を心

配して母の恵信尼に問うたところ、恵信尼は「さればごりんずは、いかにもわたらせたまへ、うたがひおもひまゐらせぬ」と答えているところから「臨終の善惡を問わず」という本義がよく領解されていた事が窺えるのである。以上における親鸞の死生観が、ビハーラの源流とも言えるものである。

2 親鸞における死生補の総括

親鸞における死生観を総括すると次の通りである。

①信心獲得以前の死は、絶対不可避なる絶望と苦悩の対象であった。

②獲得後は、内心におきて、死に対する完全なる価値転換が為されている。つまり、念仏により死を超越した喜びの領域が開顯されるのである。死による別離の苦しみに対して浄土が、俱会一処の場として皆に安らぎを与えるのである。

③臨終の善惡を問わないという看取りにおいての基本姿勢の確立と、その背景にあった苦悩の直視。

④時には習俗的な表現も窺えるが、それはあくまでも民衆の苦悩に対して直接寄り添わんが為であり、その基本的な立脚地は習俗の否定にあった。しかるに、習俗に執われた民衆の苦悩を真摯に受容せずにおれなかった所に親鸞の深淵なる死生観の一端を垣間見る事ができるのである。

⑤何時、如何なる時でも、自己に対する慚愧の心を忘れないということが挙げられるのではなからうか。常に、自己を絶対化せずに相対化し続けることによって、死に面した人に対して自己の考えを押し付けけない。

⑥親鸞における臨終とは、今、この一念における平生において語られるものであり、決して命終の一時のみに限定されたものではなかった。

これらは、源信以後華美になりすぎた臨終行儀や、逆に仏法者・後世者と呼ばれた人々によって尊ばれた清貧なる死様と一線を画した親鸞独自の死生観の確立である。

3 ビハーラを継ぐ者

親鸞の死生観が現代において具現化したものが、ビハーラ活動である。その実態を検証する事で、より深く生死を超越した親鸞の死生観の実相に迫る事ができるのである。

しかし、実際に今のビハーラを検討せんとする時、浄土真宗というカテゴリーの中でさえ、ビハーラ理念を探るのは困難である。その上、活動に至っては、これに医療・看護・介護・福祉・カウンセリングなど様々な分野とのネットワークの上に成り立つのである。それらが、「ビハーラ」という一つの理念の上でチームを組んで活動するのであるから、まさに前途多難な活動である。

実際に、そのような混迷が浮き彫りになる事件が起こる。それが、今年の一月十七日に起こった、阪神大震災である。具体的にその時の浄土真宗本願寺派のビハラの対応を例を挙げると、まず震災後、間もなく個々のビハラ会員から、活動要請の声が上げられた。その声が、具体化するのが二月の四日・五日と東京の築地本願寺で行われた第二回のビハラの全国大会であり、そこでの提案により数日後、阪神地区周辺に活動拠点としてのビハラ救援センターが作られる。更に、大阪の津村別院にできた真宗ボランティアの事務局と共に現地での活動が始まった訳である。

五月に入ると、全国的な救援活動を企図する中で、救援センターを西本願寺に移し、今日に至る訳である。

しかし、この一連の経緯をここで挙げたのは、その中のビハラ・コーディネーターの活躍に注目せんが為である。今、紹介したような経緯は何も、決して順風満帆なものではなかった。むしろ、多くの紆余曲折を経て、ようやく辿り着いた道程である。その道程の道標・潤滑油となったのがコーディネーターの存在であった。ビハラ・コーディネーターと言うのは、複雑に絡み合った現場の状況を把握した上で、供給できた様なビハラ力を検討し、それを援助する。このコーディネーターの活躍がなければ、ビハラにおける阪神大震災への組織的な対応はなかったと断言する。しかし、

それだけの力を必要とするだけに本来的な意味でのビハラ・コーディネーターの存在は未だ一握りに過ぎず、その養成というものが急務の課題となっている。

そこで、今日活躍する優秀なビハラ・コーディネーターを鑑みる時、まさに先述の親鸞の死生観が合致するのである。もちろん、技術面を除いてではあるが、これまでの経過の中からコーディネーターの資質・必要条件というものを真宗の立場から挙げると、必然的に親鸞の死生観に帰結するのである。短絡的なようであるが、これは事実である。

むすび

今日、ビハラというものをポジティブに捉える立場とネガティブに捉える立場があるが、私はあえて前者の立場を取る。ビハラは決して親鸞の教えから逸脱したものではない。ビハラは親鸞からの自然なる流れの一つなのである。現実として、未だ多くの問題を内包しているのも事実であるが、今後、様々な体験を積み重ねていくことにより、確実に根づいていく活動となるものである。

〈キーワード〉 ビハラ、親鸞、死生観、ビハラ・コーディネーター

(龍谷大学大学院)